

平成二十四年度 東京都立城東高等学校  
推薦に基づく選抜

小論文

(注意)

- 1 問題は 1 のみで、四ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙に縦書きで明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められた欄に記入しなさい。

1

次の文章(A)・(B)を読んで、あとの各問に答えなさい。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

(A)

以前、私は、才能は一瞬のきらめきだと思っていた。しかし今は、十年とか二十年、三十年を同じ姿勢で、同じ情熱を傾けられることが才能だと思っている。直感でどういう手が浮かぶとか、ある手をぱっと切り捨てることができるとか、確かに個人の能力に差はある。しかし、そういうことより、継続できる情熱を持つて人のほうが、長い目で見ると伸びるのだ。

＊奨励会の若い人たちを見ると、一つの場面で、発想がパツと閃く人はたくさんいる。だが、そういう人たちがその先プロになれるかというと、意外にそうでもない。逆に、一瞬の閃きとかきらめきのある人よりも、さほどシャープさは感じられないが同じ＊スタンスで将棋に取り組んで確実にステップを上げていく若い人のほうが、結果として上に来ている印象がある。

プロの世界は、将棋界にかぎらず若いからといって将来の保証はまったくない。確かに、年齢が若ければ集中力も体力も充実している。だからといって、その人に明るい未来があるかの保証はまったくないのだ。

奨励会を抜け出すのも大変だが、たとえば、タイトル戦に四、五段の人が出ようと思ったら、予選で若手同士でつぶし合わなければならぬ。勝ち上がったもA級が待っている。それを全部勝たなくてはいけない。層の厚さという点で、私のころとはかなり状況が違う。やっても、やっても、結果が出ない……：：：そういう状況だ。しかし、そういう中でも、腐らずに努力していけば、少しずつでもいい方向に向かっていくと思っている。

やっても、やっても結果が出ないからと諦めてしまうと、そこからの進歩は絶対がない。周りのトップ棋士たちを見ても、目に見えて進歩はしていないが、少しでも前に進む意欲を持ち続けている人は、たとえば元より時間がかかっても、いい結果を残しているのである。

将棋界は、現役のプロの棋士はおよそ百五十人だが、力が衰えると、すぐに置いていかれてしまう可能性があるという意味では怖いところだ。一週間、まったく駒にさわらずに将棋から離れていると、力はガクンと落ちてしまうだろう。元の棋力を取り戻すには一週間の何倍もの努力が必要となる。

どの世界においても若い人たちが嫌になる気持ちには理解はできる。周りの全員が同じことをやろうとした

ら、努力が報われる確率は低くなってしまう。今の時代の大変なところだ。何かに挑戦したら確実に報われるのであれば、誰でも必ず挑戦するだろう。報われないかもしれないところで、同じ情熱、気力、モチベーションをもって継続してやるのは非常に大変なことであり、私は、それこそが才能だと思っている。

誰でも、時には落ち込んだり、挫折感を抱いたり、飽きたりもする。特に最近では、他の刺激を受ける機会が多い。誘惑もされやすい。若い人たちが自分を信じ、諦めずに一つのことを続けるのは難しい。

一つのことには打ち込んで続けるには、好きだということが根幹だが、そういう努力をしている人の側になると、自然にいい影響が受けられるだろう。さらに、ペースを落としても続けることだ。無理やり詰め込んだり、「絶対にやらなきゃ」というのではなく、一回、一回の集中力や速度、費やす時間などを落としても、毎日、少しずつ続けることが大切だ。無理をして途中でやめてしまうくらいなら、「牛歩の歩み」にギアチェンジしたほうがいいと思っている。

「天才とは一パーセントの閃きと九九パーセントの努力である」

というエジソンの言葉は、どの世界にも共通する真理をついた言葉である。

(羽生善治『決断力』による)

〔注〕奨励会：将棋のプロ棋士を養成・選抜するための組織

スタンス：物事に対する立場や姿勢

モチベーション：物事を行う動機や意欲、やる気

(B)

モチベーションを上げて結果を出すための方法として、目標を設定するやり方がある。

企業で言えば\*ノルマのようなもので、共通のゴールを作り、方向性を合わせて前進するというやり方だ。だが、この中には微妙でデリケートな問題がいくつも含まれている。

目標を作ることによって、逆に義務感や強制されているという気持ちが強くなってしまい、やる気が落ちてしまうケース。

本来ならば、もっと多くのこと、難しいこともできるのに、目標が設定されたことによって、限定されたところに安住してしまうケース。

「駄目かな」と思いながら続けてみたら、意外と簡単にできてしまつて、本人も驚いてしまうケース。目標はクリアできなかつたものの、そのプロセスで多くの事を学んで、気がついてみたら実力を上げていたケース。

このように、目標の作り方によってまったく異なつた展開が予想されるわけで、その線引きが目標の意味や価値を決めると言つても過言ではない。

では何を基準にして目標を設定すれば良いのか。

私は、そのキーワードは「ブレイクスルー」だと思つている。

個人であれ、団体であれ、まだ届いていない領域をめざすこと。もう少し頑張れば今までと異なる景色が見える「次なるステージ」を目標とすること。これがブレイクスルーだ。

国家におけるブレイクスルーの典型的な例が、一九六〇年代初頭にジョン・F・ケネディアメリカ合衆国大統領（当時）が計画した「人類初の月面着陸」（アポロ計画）ではないだろうか。

その百年前にそんな目標を作つたとしても単なる絵空事で、誰も興味を示したり、共感したりしなかつただろう。

アメリカが経済発展し、科学技術の開発も進み、宇宙開発に関しては「ライバルのソ連に追いつけ、追い越せ」という気運が高まつていた、あのタイミングで目標を設定したからこそ、多くの人々が夢や希望を感じ、その目標に向かつて猛烈な努力をしたのではないのか。

現在では、そうした目標を設定するのが難しい。「経済成長前年比十二パーセント」と言われても、そこに夢や希望を感じるのは、きわめて少数の人々にすぎないからだ。

しかし、個々の目標設定はまったく別の話で、達成されていないことは山ほどある。

そのなかから自分にとってベストな目標をきちんと設定しなければならぬ、そんな時期に差し加かつているのではないだろうか。

（羽生善治『大局観』による）

〔注〕ノルマ…割り当てられた仕事の量  
プロセス…物事を進める順序。手順・過程

問1

文章（A）で、筆者は才能をどのようにとらえているか、90字以内でまとめなさい。

問2

文章（B）で、筆者は目標設定の方法で大切なことは何であると考えているか、90字以内でまとめなさい。

問3

文章（A）・（B）を踏まえて、高校生が才能を伸ばしていくためには、どのようにすればよいと考えるか、あなた自身の経験も具体的に挙げながら360字以上400字以内でまとめなさい。